
乙女心を学ぼう！

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女心を学ぼう！

【Nコード】

N8039F

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

妹の恋事情に悩む一護。その原因はある死神のせいだった！？

鳥が飛び交う空に、一人の死神が居た。黒い着物に、オレンジ色の髪。なんともミスマッチな色の組み合わせだが、これが意外にもしっくりくる。雲に触れる事が出来そうな高さに居る彼は、一人何かを考えているようだった。

「……どーっすかなあ……なんて説明しよう……」

頭を抱えて、考えている。

「おーい、一護ー!」

青い空に、赤色の髪がよく目立つ。先ほどまで悩んでいたのは黒崎一護。

「恋次……」

赤髪の男は阿散井恋次と言い、一護の良き理解者だった。

「どうしたよ、こんな所で?」

「何だっついていいだろ」

ほっといてくれ、と言わんばかりに冷たい言い方だった。

「そんなに気になんのかよ、妹の事」

「当たり前だろーがっ!!!!!!!!!!!!!!」

カツと振り向きながら怒鳴る。妹、とは姉の方、つまり遊子の事だ。

「別に人間なんて恋するもんだろー？ほうつときゃ良いじゃねえか」
恋次がため息混じりに言うのを一護は冷たい眼差しで見ながら、「お前に相談しようと思った俺が馬鹿だった…」と、がっくり肩を落す。

「で、相手は？」

「…外見がだな、髪が逆立ってて、銀髪で背が遊子より少し低くて翠の目で…」

一護の周りの空気がどんどん重くなっていく。

「…おいおい、それって…」

「……恋次もそう思うか……」

大きくため息をつき、「なんでよりによって冬獅郎なんだよ…」と小さく呟く。そして、恋次が

「日番谷隊長は結構こっちでももててるからな…ライバル多いぞ…」

と一護の肩に手を乗せながら言う。

「ちげーよ、そういう問題じゃなくてだな…。何で恋する対象が死神なんだよ…!?!」

「んなの知るかよ…。つーか、あの妹、死神見えてたんだな」

「話を逸らすな…!!」

しばらくその言い合いが続く。「…ったく…良いオニイチャン気取りかよ…」恋次が呆れたように言って、「とにかく、日番谷隊長に

言ってみたらどうだ」と、一護を引っ張って行く。

「待てよ、訊くってなにを……！！おい、恋次っ……！！」

「うるせえな。日番谷隊長から思いつきりふってもらえば良いだろ」

「何でお前はそんな考え方しか出来ねえんだよっ……！！」

オレンジと赤色の髪が青い空を徐々に移動して行った。

黒崎家。

「ねえ、夏梨ちゃん。あの子どもこの小学校なのかなあ？」

「遊子、アンタいい加減にあきらめなよ」

あいつに会ってから、遊子は何かおかしい。絶対におかしい。つか、絶対あいつに一目惚れしてる。

そついう考えをここ最近毎日のようにしている夏梨は、なんとか日番谷の事を忘れさせようと「あきらめろ」の一点張りである。

「あー、また来てくれないかなあ、あの子」

「だあかあらあ、あきらめろっの……！！」

夏梨は日番谷が死神であることを知っている。だから、遊子の恋が叶わない事を知っている。つまり、夏梨には遊子の恋を止めなければならぬのだ。遊子が傷つかないように。

「また助けに来てくれないかなあ……」

織姫宅。

「虚に襲われていた茶髪の…お前より少しだけ背の高くて、母のピン止めをしてる女の子を助けたか？」

「いきなり何だ、黒崎？」

織姫の家にズカズカと何の遠慮もなしにいきなり入ってくる一護たちに少し困惑をしながら、一護の質問に答えた。

「何何？隊長、何かしたんですか？」

「なんもしてねえよ！何だその明らか楽しんでるような声は！？」

「冬獅郎くん、なんかしちゃったの！？」

織姫と乱菊も加わって、話がとてもめんどくさくなってくる。一護は2人を落ち着かせ、事のあらましを説明する。

「隊長、こっちでももてるんですね…」

「で、返事はどうするの！？」

2人のテンションが先程より高くなっており、とても男子軍には手出しが出来なかった。

「悪いが…俺にその記憶が無え」

日番谷のその声で、一瞬にして場の空気が凍る。

「なっ…何だよ…」

日番谷が慌てたように言うと、乱菊が間髪入れずに、

「隊長、女の子の特徴くらい覚えたらどうですか！！？」

「しるか！！俺は女好きじゃねえんだよ！！！！いちいち特徴なんか覚えてられつか！！！」

「冬獅郎くんひどいよ！女の子一目惚れさせといてその子忘れちゃうなんて！！！」

「そいつが勝手に俺に…ほ…惚れた…ただだろーがッ！！！！！」

言い合いが続き、「…とにかく、返事はどうするんですか、隊長？」と、乱菊が仕切りなおす。

「んなの…断るに決まってるだろうが…」

頭を乱暴に5回くらい掻いて、ため息を大きくつく。

「冬獅郎、断る時は…その…それとなく…なんつーか…遊子を傷つけないようにしてやってくれよ？」

「黒崎くん優しいね」

「ほんと、隊長とは大違い！」

「んだと？」

日番谷の霊圧が少し上がる。それに少し驚き、乱菊たちは一瞬固まる。そして、次の瞬間、全員の表情がピリッと引き締まる。

「虚か？」

「みたいだな」

一護の問いに、恋次が軽く相槌を打つ。

「一角達がすぐ倒しちゃうんじゃない？」

「あいつらが虚程度を相手に戦いに出るわけねえだろ。俺は行ってくるぜ」

日番谷は死神の姿になり、窓から颯爽と飛び出す。

「あ、待てよ冬獅郎！！まだ話が終わってねえだろ！！！！」

一護が日番谷を追いかける。「面白そうな事になりそうね」「乱菊がそれに続き、「ちょ…っ、…ったく…」と恋次も嫌そうに続く。織姫は乱菊からの報告を大人しく待つことにした。

黒崎家。

「夏梨ちゃん、あたし買い物行ってくるから、留守番お願いして良い？」

「あ、おい、今は行かない方が…」

夏梨がそう言うのを聞かず、ドアの閉まる音、そしてそのドアの鍵がかけられる音が聞こえた。

「…ったく…いま虚がうついてるってのに…」

窓から空を見上げてそう呟いた。

「…もしこれで冬獅郎がまた遊子を助けたりしたら…あたしどう諦めさせたらいいんだよ…」

と、頭を抱えていた。

その頃。

「黒崎、お前はそっちに行け。意外に数が多い。4つに分かれるぞ」
「ちょ…俺の話は…」

一護の話を聞かないで冬獅郎は瞬歩で消えてしまった。

「あのヤロウ…」

「おら、一護！さっさと行くぞ！！」

恋次の声に、渋々「おう」と答えた。

「数が多くて嫌になるな…」

冬獅郎がそう言ったとき、何処からかガサツ、という買い物籠を落す音が聞こえた。

「ん？」

そっちに目をやると、1人の女の子が転がっていたジャガイモや人参を拾い集めていた。その女の子の髪の色は茶色で、背は恐らく日番谷と同じか、それよりちょっとでかいくらい…そして、苺のピン止めを付けていた。

（あいつか…黒崎の妹ってのは…助けた記憶なんてねえな…）

そう思っていると、遊子の近くに虚の気配がした。

「…ったく…」

少しため息混じりにそう言うと、空から地面へと飛び降りた。

「きゃ……」

遊子はすぐ隣にももの凄く強い風が通り過ぎたのを感じ、辺りを見回した。

「伏せてろ」

「え……」

ムリヤリ上から頭を押さえつけられ、その瞬間に頭上に風が走る。直感で分かった。あの子だ、と。

「お前霊圧意外に凄いな、虚が大量に居んぞ」

ボソツと呟いて、「しばらくそのままな」と言い聞かす。

「破道三十三、蒼火墜」

右手を前に出して、呟く。日番谷の鬼道は威力が強く、その上攻撃範囲が広い。たいていの虚はやられてしまっただろう。まもなくして、虚は遊子の周りから跡形も居なくなった。

「もう動いていいぞ、立てるか？」

「あ、うん、ありがとう……」

差し出した日番谷の手を軽く掴み、立ち上がる。

「あ、あの……」

「じゃあな」

遊子に余計な事を言われる前に、瞬歩で姿を消した。

「あ…あれ？消えちゃった!？」

驚いて辺りを見回し、

「…名前だけでも聞きたかったな…」

と、小さく呟いた。

織姫宅。

「馬鹿ですか、隊長!?!？」

「何がだ」

乱菊の声に耳を押さえながら日番谷は言う。

「ちゃんと断ないとダメじゃないですか!!カッコつけちゃって
!?!」

「カッコつけただあ!?!誰が、一体いつ、ンな事したよ!?!」

乱菊の言葉に、まるで心外だ、とでも言うように日番谷が怒鳴る。

「冬獅郎くん、まさか無言でその場を立ち去ったりとか？」

織姫が聞いてきたので、「じゃあな、とだけ行ってだな…」と小声で言つと、

「それはだめだよ!思いっきり逆効果!?!」

「隊長、乙女心ってやつ勉強したほうがいいですよ」

2人からそう攻められ、日番谷は完全に負けてしまい、長々と説教をくらってしまった。

黒崎家。

「もうね、すつつつごくカッコよかったんだよっ!!」

遊子のキラキラした目を見て、夏梨と一護は同時に大きくため息をついた。

「どーすんの、一兄？」

夏梨が小さく一護に耳打ちする。「どーもできねえな」と、がっくり肩を落とした。「説得し続けるの結構めんどくさいんだからさあ」と、夏梨は一護と同じように肩を落とした。

織姫宅。

「…分かった。分かったからもう寝させろ…」

「ダメです！ちゃんと乙女心を理解してもらわないと!!」

「そつだよ、冬獅郎くん！」

日番谷は、しばらく眠れない日々が続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8039f/>

乙女心を学ぼう！

2010年10月9日17時23分発行